

## 人種概念の包括的理解に向けて

竹沢泰子

二〇世紀は、ホロコーストをはじめ、人種主義に根ざす多くの悲劇を生み出した。共存の世紀として期待された二一世紀を、われわれは今ふたたび悲劇の生き証人として歩み始めている。人種主義による争いや差別は絶えることなく繰り返され、しかも、より複雑かつ巧妙化した姿でわれわれの前に現れている。

イラク人捕虜に対する性的虐待問題が端的に示したように、アメリカ合衆国（以下「アメリカ」）の対イラク戦争に、人種主義の跡を見いだすことは決して難しくはない。それゆえにイラク戦争は、アメリカにおいてでさえ、人種主義的戦争といわれたヴェトナム戦争の悪夢の再現であると論じられている。またアメリカ国内では、違法であるにもかかわらず、警察によるアフリカ系アメリカ人やラティーノ、また九・一一以後はアラブ系をも標的としたレイシャル・プロファイリング（人種主義的な取締りや犯罪情報分析）が活発化している。ヨーロッパをみても、文化の差異を移民排斥のレトリックとする「新人種主義」<sup>（ニューレイシズム）</sup>の脅威は、一向に下火になる気配をみせない。

最新の医療技術による臓器移植や人工生殖においてでさえ、人種がいかに関々の行動や思考を支配しつづけているかを思い知らされる。二〇〇三年のヒトゲノム解読完了後いっそう、医療現場においては特定の疾病や投薬の有効性などが人種や集団（population）という枠で語られ処置される場面が増加しており、情報の応用のされ方いかんによつては、新たな優生学的差別が生まれることが懸念される。さらに祖先の「人種」構成率の割りだしを謳う、人種主義

的な遺伝子情報の商業化が、ついに現実のものとなっている。

しかし人種差別は、日本にとって決して対岸の火事ではない。拉致問題の表面化をきっかけに頻発する在日朝鮮人に対するテロリズムや嫌がらせ、移住労働者らへの住居差別、被差別部落出身者に対する結婚差別、外国人の「入浴お断り」など、足下をみれば、人種差別はきわめて現実的な日常風景である。現職都知事による「(中国人の)民族的DNAを表示するような犯罪が蔓延する」といった発言は、「日本民族」一血統主義、つまりは日本版の人種主義を露呈している。<sup>(2)</sup>

日本が、一九六五年に国連で採択された人種差別撤廃条約を批准したのは一九九五年のことであり、これはじつに国連加盟国中一四六番目という遅さであった。しかも、条約締約国には法律による人種差別の禁止が義務づけられているにもかかわらず、日本は法的規制をもたず、法改正も行っていない<sup>(4)</sup>。(反差別国際運動日本委員会二〇〇二)。二〇〇一年三月には、人種差別撤廃委員会から「人種差別を禁止するための特別な法律を制定することが必要である」(最終所見 第一〇項目)と、日本政府が勧告を受ける事態にまで立ちいたっている。なぜこれほどまで長く批准しなかったのか、なぜ今日においても人種差別を禁止する法律が存在せず、現職知事や政府高官による露骨な人種差別発言が容認されるのか——こうした状況の根底には、人種概念の理解をめぐる根本的な問題が横たわっているように思える。

本書は、現代の人種差別問題を視野に収めつつ、人種概念を再検討すべく編まれているが、人種とは何かを解説するための手引でもなければ、人種差別解決のための処方箋でもない。しかし現代の人種主義を考えるうえで、人種概念を歴史化し、ヒトの多様性を理解するという作業は、一見遠回りのようだが避けては通れぬ回路である。たしかに人種差別という現象がなければ人種概念は成立しえない。しかしながら、いったん確立した概念は今度は現象の認識および現象そのものを規定する力を及ぼす。いいかえれば、従来の学術的な人種概念自体が、その概念に収まらない現象を人種差別として認識することを妨げ、結果的にその現象を容認し、再生産しつづけてきたといえる。<sup>(5)</sup> 本書において、人種概念を学術的に洗い直そうとする意図も、ここにあるのである。

周知のように人種をめぐっては、とくに欧米に膨大な研究の蓄積がある。そうしたなかで本書は、学問領域の多様性とアジアやアフリカの経験を積極的に含めた地域的相対化を特徴とし、こうして提示される多角的な視点から人種概念を再検討することを意図している。文化人類学やアメリカ研究という限られた分野を専門とする私にとって、本書のこうした意図を実現させることが容易でないことは、十分に承知している。

しかしながら、人種を切り口とする文献を読み、国内外の研究者と意見を交え、研究を進めてきた過程で、とりわけ近代や自らの経験に偏重しがちな欧米における人種概念の射程の狭さと、学問領域間（とくに自然科学と人文・社会科学）の断絶性に、違和感を覚えてきた。長年抱えてきたこの違和感、これが編者としての私の出発点である。本書は、いわば問題提起型の書である。インドのカーストとアフリカの紛争、「コーカソイド人種」と旧約聖書、黒人差別と部落差別、あるいは古典的な人種主義と新人種主義という一見異質にみえる事象をあえて同じ土俵で論じることにより、共約不可能と思えたものに通底する何かがみえてこないだろうか。

学界におけるいわゆる西洋ヘゲモニーゆえに生じている人種概念のひずみと、学問領域を超えて人種を共通言語として対話することの困難さ——第一部である本論では、これらの現状をふまえて、きわめて限られた見地と問題意識からではあるが、人種概念をめぐる既存研究の課題を指摘し、さらにさまざまな専門領域や地域で異なる言語で語られがちなそれぞれの「人種」を包摂的に理解する可能性を模索してみたい。

人種をめぐる問題がきわめて複雑であることを考えれば、個々の問題を、コンテクスト文脈のなかに位置づけながら丹念に追っていく作業が、学問的常道である。あるひとつの事象さえも、時代や状況、また他との関係性に応じてその意味を変化させるのであり、その性格を単純化して把握できないことはいうまでもない。アイディオリキジェンダーや階級との交錯を含め個々の歴史的社会的状況のなかで差別も重層的に決定されるのであり、アイディオリキ分節化しながら理解することの重要性をもはや強調する必要もないだろう。エスノグラフィ（民族誌）はそのためにあるのである。しかしK・マリーツクが『人種の意味』において警鐘を鳴らしているように（Maiz 1996）、誰もが人種について共通の言語で語るすべを探そうともせず、差異のみを叫ぶのであれば（そのような研究は、さらに望まれるとはいえず、無数に存在する）、われわれは

現在起こりつつある現象やこれから生じるかもしれないと予感される事象について、これが、歴史に照らして何らかの兆候であるのか否か、それをさぐる手だてさえ失いかねない。

本論では、時代も地域も異なるそれぞれの研究で語られる「人種」（あるいはここで「人種」と呼ぶもの）を、「小文字の人種 Race」、「大文字の人種 Race」、「抵抗の人種 (RR)」という三つの位相の下に包摂することを試みる。異なる文脈で語られる「人種」、一見何の接点もないかのようにみえる「人種」が、その根底においていかに相互に接合されるか——それを少しでも読み解く可能性を模索することが本章の狙いである。